

戦国期初頭の将軍と大名

文学研究科史学専攻博士後期課程

4160130001 小池辰典

博士論文では、応仁・文明の乱（以後「大乱」）や明応の政変（以後「政変」）が発生した十五世紀後半から十六世紀前半をもって戦国期初頭とみなし、当該期における政治構造の解明を進めつつ、将軍と大名の関係について言及した。

なお、十代将軍は義材・義尹・義植と改名していったが、便宜上、義材で統一する。十一代将軍は、義遐・義高・義澄と改名しており、こちらは義澄で統一する。また、「政変」後に発生した争乱に関して、足利義澄を擁立して政変を起こした側を義澄陣営と呼び、政変で追放された足利義材側を義材陣営と呼ぶ。

かつて、戦国期の将軍は有力大名の傀儡に過ぎないとみなされてきたが、幕府の政治構造の解明が進んだことや、十六世紀中頃以後を中心とした研究において、将軍は栄典授与などを通じて戦国大名に対して影響力を発揮していたことがわかってきた。これにより、現在、将軍は自律性を維持しており、影響力も備えた存在だと捉えられるようになってきている。

しかし、戦国期初頭に関しては「大乱」や「政変」という事件をもとにした下剋上史観のもと、将軍とは衰退する存在であるという認識が根強く残っており、当該期の将軍の動向を踏まえた研究は、最近になってようやく進み始めた。

そのため、冒頭のように戦国期初頭の政治構造について踏み込みつつ、将軍は諸大名に見放されて衰退していったかどうかの検討を目指した。それに際し、細川京兆家一三好家研究を中心に進められてきた畿内政治史を諸大名の動きを踏まえて相対化しようとする研究動向を意識しつつ、将軍の権威的側面についても留意しながら検討を進めた。

第一章では、九代将軍の足利義尚による鉤の陣の実態を検討した。将軍自身が出陣したこの遠征について、従来は大名がほとんど集まらず失敗したものと捉えられ、通史などにおいて「大乱」後の混乱を示す際の代表的事例として叙述されてきた。

しかし、検討の結果、室町殿御分国の大名は八割ほどが参加しており、それも自ら参陣を表明するものや、遠征に備えて時限法をつくるといった熱心なようすが垣間見えることや、この遠征を切っ掛けに在京を再開した大名の存在を指摘した。

あわせて、将軍が遠征中に病没したことを受けて分国中に服喪を命じた大名の存在などを提示した。

このように、鉤の陣とは「大乱」によって将軍の声望が失われたことを示す事例ではなく、依然、将軍は影響力を維持していたことが見えてくる事例であることをあきらかにした。

第二章では「政変」の実態について検討した。この事件は、十代将軍の足利義材が畠山義豊を討伐しようと自ら出陣した隙をつき、細川京兆家・日野富子（前将軍生母）・伊勢貞宗（政所執事）らが義材従兄弟の足利義澄を擁立して京都で挙兵し、将軍義材を捕縛したものであり、これによって第一次義材政権は崩壊した。

この事件に際し、諸大名は遠征という将軍による大名への圧迫行為を嫌って将軍挿げ替えに協力したとも、事件を気にかけない程に将軍家に対する関心を失っていたともいわれてきた。

しかし、「政変」に至る政治過程について再検討したところ、諸大名の将軍に対する反発とは、将軍が側近葉室光忠を重用しすぎていたことを問題視していたもので、諸大名が本来狙ったこととは「御所巻」という室町幕府では伝統的な強訴の類を行うことで、幕政の正常化をすることにあつたと指摘した。すなわち、依然として諸大名は幕政の安定化を気にかけていたことが見える訳である。

さて、「政変」で成立した義澄陣営は、細川京兆家と政変を決行した側の将軍家（日野富子・伊勢貞宗ら）の動向解明が中心であり、諸大名側から義澄陣営を捉える向きは乏しかった。そこで、それら諸大名の動きを第三章・第四章で追った。

第三章では、明応三年（一四九四）に近江の六角高頼と分家の山内就綱の間で行われた合戦を、諸勢力の動きを踏まえて捉え直した。従来この合戦は六角家の内紛として捉えられてきたが、再検討の結果、多くの勢力が関与するものだとわかった。

そもそも、比叡山が六角高頼討伐を行うように義澄陣営に対して強訴しており、これに対し、京兆家はこれまで高頼赦免で動いていたためか目立った動きを全くみせず、代わりに、赤松家が自家利益のために高頼討伐を支持しており、その支持を受けて、義澄陣営は比叡山・山内就綱連合による攻撃に踏み切ったため、六角家内部で収まらず、美濃の土岐家や越前の朝倉家など周辺を巻き込む大規模な合戦になったことを指摘した。

このように、京兆家の関与が極めて限定的なところで、政局が大きく動くことをあきらかにした。

第四章では、「政変」に際し将軍義材捕縛のため、京兆家と共に直接動いた畠山義豊（分裂した管領家の一方・義就流）に注目した。従来の研究では、義豊は京兆家の従属的存在とみなされてきた。

しかし、義豊は京兆家が畠山尚順（分裂した管領家の一方・政長流）と和平出来ないか打診した際に強く拒否するなど、自律性を維持していたことが確認できた。また、「政変」後の義澄陣営と義材陣営の争乱について、従来の京兆家を中心とした視角では、義材陣営と明応八年（一四九九）に行った決戦程度しか知られていなかったが、義豊を中心に探ったところ、例年とまではいかないまでも、両陣営は盛んに衝突を起こしていることが確認できた。

以上、第三章・第四章で確認したように、京兆家は勿論ながら、他大名の動きについても見ていくことで、畿内政治史を更に深く捉えることが可能になった。このように京兆家を含

めた諸大名の動きによる多角的な視覚が重要になってくるだろう。

第五章では「政変」後の争乱が収束し、第二次義材政権が成立するまでの過程について考察した。

義澄陣営が発足する契機となった「政変」には、将軍家の人間（日野富子・伊勢貞宗ら）が参加しており、彼らの影響によって、将軍足利義澄は京兆家に対して自律性を発揮し得たと捉えられている。

この日野富子・伊勢貞宗らに相当するような存在が、第二次義材政権が成立する際に足利義材のもとに存在していたかを確認すべく、畠山尚順に注目した。

その結果、畠山尚順は「政変」後の争乱において、義材を頂点とする権力構造を紀伊など南方で形成しており、それが第二次政権発足に際し、義材の権力基盤となってその自律性維持に一定の意味をもたらしたと指摘した。

第六章では、十五世紀後半を中心に「大名」という言葉の使われ方を検討した。

室町時代では、守護大名という学術用語によって「守護」＝「大名」という認識が強い。だが室町幕府研究の進展にともない、中央政治を担う在京大名と地方統治を担う守護は別個の存在であるとの見解が提示された。また、鎌倉府研究では、「大名」と「守護」が別個なものであると考えられている。そこで、在京大名の内実を掘り下げつつ、それが「大乱」後も継続したかを検討した。

結果、「大名」には、管領・御相伴衆など幕府でも重責を担う家柄で、将軍に意見具申をできる存在だけを指す場合があり、それは、十六世紀中頃以後になっても用いられたことを確認した。そして、この「大名」を仮にタイムイと呼ぶことにした。

そのため、「大名」とある際、それが一般的な意味か、特殊な用法で用いているかを勘案する必要性を提示した。

以上のように、戦国期初頭を中心に将軍と大名の関係を確認した。

先ず、政治構造については、第三章のように、六角家以外、京兆家・赤松家・比叡山らの思惑が重なり、非常に入り組んだ事件となっているものもある。このようなものを如何に巧く捉えていくかも、戦国期初頭の政治構造を再検討していく上で重要になってくるであろう。

次いで、将軍と大名の関係だが、先行研究によって、栄典授与といった「利益」をもたらすことで影響力を発揮しており、形骸化せず自律性を保っていたことが判明している。

この将軍研究を引き継ぎ発展させていく上で、「武門の棟梁」といった権威面にも踏み込んでいく必要があると考えた。そして、将軍権威が衰退に向かうと考えられてきた下剋上史観を支える「大乱」「政変」の影響について見直し、これらの事件以降も将軍は諸大名から推戴される存在であることを確認した。また、将軍が没した際にこれを悼んで分国中で喪に

服すよう命じた大名の存在がいたことは第一章で触れた通りである。

このように将軍権威が衰退する切っ掛けというものについて大幅な見直しを行った以上、十六世紀中頃、宣教師の目に将軍が「名誉に関することのみにおいては日本全国の君主」と映ったことや永禄の政変などで「天下諸侍之御主」と呼ばれたことに注目していき、「武門の棟梁」といった権威面にも目を向けていくことが、今後、将軍研究や畿内の政治構造を解明していく上で重要だと考える。